經濟論叢

第六十三卷　第五・六號

社會政策の本質に關する再論……岸本英太郎

因果性問題を中心とする……田中眞晴
ウェーバー方法論の研究

農村における商品生產の變貌……山崎武雄

京都大學經濟學會

第六十三卷　一九四　第五、六號　五四

農村における商品生産の變貌

――實態調査覺書――

山崎武雄

一

戰後の農地改革によつて土地所有關係は一變し、日本農業における資本主義の發展が積極的に問題とされるに至つた。然し乍ら、地主階級の沒落にも拘らず、農家の經營規模は依然として零細であり、資本主義的發展は必ずしも明瞭な形をとつては現れていない。從つてわれわれはまず農家經濟の實態を分析し現實には如何なる發展方向の差異を示しているかを明かにせねばならない。わたくし達が昨年夏鳥取縣西伯郡中濱村において行つた實態調査は、かかる意圖をもつたものである。ここでは當村の代表的な一農業部落において、農産物の商品化の視角からこれを明かにしようとした。

本村は極めて特異な農村であるため、まずその全般的性格を明かにしておかねばならない。戰前においては本村は全國有數の養蠶村として知られており、昭和八年においては桑園面積は總耕地面積の六〇%、畑の七二・七%を占めていた。水田の狹少なることと相俟つて、農作物作付面積の割合においても、米、麥作合計二五・五%にすぎず養蠶專業の農家が多數を占め且つ雇傭勞働者に依存する集約的經營が行われていたのである。

然るに戰時に入ると共に食糧增産の國家的要請により、かかる養蠶中心の經營方式は完全に破壞され、食糧生産に轉換せざるをえなかつたのである。

しかも、本村においては戰時中耕地の約三分の二が飛行場用地として收用せられ、多數の農家が强制立退を命ぜられた。これらの農家は殆ど村内に移住し他に轉業するか、或は零細な耕地をえて農耕を續けるの外はなかつたのである。

いま職業別に戰前戰後の人口を比較すれば昭和十年の調査に

よれば、總戸數七一五戸のうち農業五五九戸（七八・二％）商業五二戸（七・三％）漁業五〇戸（六・九％）工業三二戸（四・五％）其他（三・一％）總人口三七五九人であるが、戰後の調査によれば、總戸數九八六戸のうち農業四六八戸（四七・五％）工業一二四戸（一二・六％）漁業六〇戸（六・一％）商業三七戸（三・八％）公務自由業五三戸（五・四％）其他（二四・六％）總人口四七九九人となつている。

即ち、人口は戰後激增し且つ職業別においてもその變化は著しい。人口增加は離村者（國內及び海外への）の歸住、戰時中疎開或は飛行場勤務等の爲に來住せるものの定住などに基く。職業別にみれば、農、商は絕對的並に相對的に激減している。農業は主として前述の事情に基き、商業は戰時中よりの統制、配給制度等による。漁業は絕對的には增加しているが相對的にはやや減少している。工業は絕對的並に相對的に激增しているが、その殆どすべてが工業勞働者である。

特に注目すべきは戰後において其他の項目が二四・六％に激增していることである。これには進駐軍勞務者、闇ブローカー浮動的賃勞働者及び無職の者等が含まれており、それらの中には戰災者、引揚者もあり、極めて窮迫せる狀態にある。右により、戰前における農業及び商業人口が漸次轉落してこの階層或は工業勞働者となり、且つその他の外部よりの增加人口も殆ど大部分この階層に屬することが明かであろう。更に本村の人口密度は一方里當り一萬千餘人の多きに達しており、戰後激增せる人口もその經濟的基礎は極めて薄弱なることを示している。

かくの如き人口增加は最近における現象にすぎず、本村においてはその人口は明治初年以降僅に增加しているにすぎなかつた。これは農民離村及び間引きの慣習によるものである。離村者は阪神を中心とし國內都市に出たのであるが、一部にはアメリカ、中國等への海外渡航者も比較的多かつた。

かかる現象は本村の經濟事情に基く。本村は德川末期に發展したのであるが、既に當時穀作のほか棉、藍、煙草、千瓢、西瓜等の商品作物が栽培された。特に棉作は最も重要であり、木綿紡織が農家の家內工業として盛に行われた。元治元年既に米子を中心に約四〇軒の木綿問屋があり、本村においても幕末に數戸の木綿仲買人並に宿屋があつた。明治五年において既に總人口三千七百餘人に達している。これを前述せる昭和十年のそれと比較せよ。そこには殆ど人口增加はみられない。農業生產力の發展と相俟つて、當時既に本村においては、その人口收容力の限界に達していたことを明かに示している。

明治維新以後においても棉作中心の經營であり、木綿紡織は更に增加したが、やがて外國綿の輸入、國內の綿工業の發達と共に手織木綿は全く衰え、棉作は主として蒲團用として一部で營まれたにすぎない。

棉作に代つて本地方に發達したのは養蠶業である。養蠶は德

川時代においても一部では行われたが、維新以後明治十年すぎより縣當局の奬勵、先覺者の誘導扶掖等により次第に普及し、特に二十年以降急速に發達した。かくて大正、昭和と更に發達し、昭和の農業恐慌期にはその頂點に達した。昭和八年における桑園面積の割合は既にのべたが、同年における作付面積の割合は、桑園四五・八％、米一三・四％、麥一一・八％、甘藷八・五％、西瓜一一・九％、蔬菜四・九％、豆類二・五％、棉〇・六％、其他となつている。卽ち、主食の生産は少く、桑に次いで西瓜、蔬菜等商品作物の生産の比重が高い。これは本地方が砂質土壤であり水田が少く、且つ一毛作田でその生産力の低いことにもよるが、むしろかかる自然的條件を背景とせる社會的諸條件に基くものである。また、德川時代以來商業的農業が發達していることにより、農民の意識も水田地帶のそれとは異り、云わばより企業的であり、農産物の價格變動に對して敏感であり、作物の轉換もより容易に行われていることも注目されねばならない。

戰前に於ける土地所有關係についてみれば、所有の集中度高く階級分化も進み過小農が壓倒的多數を占めていた。且つ村外地主の所有地が約三〇％に達していた。而もかかる土地所有の集中は商業的農業の發展と相俟つて早くから行われ、これと照應して小作爭議も大正年間に活潑に行われ、當時既に小作料引下げも實現していた。

二

本部落全八四戸の階層別土地所有並に經營規模は次表の如くである。

第一表　階層別土地所有狀態

	二町以上	一―二町	〇・五―一町	〇・二―〇・五町	〇・一―〇・二町	〇・一町以下	〇	計
戸數	二	五	一九	一九	一五	二四	八四	
割合（％）	二・四	五・九	二二・六	二二・六	一七・九	二八・六	〇・三二・六	一〇〇
面積（反）	五五・一	六七・九	一二九・九	五四・〇	一六・七	〇	〇	
割合（％）	一六・五	二〇・一	四〇・四	一六・八	五・二	〇	〇	一〇〇

第二表　經營規模別農家戸數

	二・五町以上（A）	二・〇―二・五町（B）	一・〇―二・〇町（C）	〇・七―一・〇町（D）	〇・五―〇・七町（E）	〇・三―〇・五町（F）	〇・二―〇・三町（G）	〇・二町以下	計
戸數	二	一〇	二二	二〇	一六	八	一五	八四	
割合（％）	二・四	一一・九	一五・五	二三・八	一九・〇	九・五	一七・九	一〇〇	

註　以下各層をＡＢＣ……で表わす。

まず第一表により土地所有關係をみれば、農地改革後においてもなお集中化が明かである。卽ち土地を全く所有しないものが最も多く二八・六％を占めているが、彼等のうち非農家は極めて少く、後述する如く殆ど兼業を行つてはいるが農業を主と

するものが比較的多いのである。一町以上の所有者は八・三%にすぎないが、その所有面積は全耕地の三七・六%を占めている。これに反し全戸數の四〇・五%に當る五反以下の所有者の所有地は耕地の二二%にすぎない。

次に經營規模別にみれば、一町以上の農家は僅か一四・三%にすぎず、五反以上にても五三・六%である。各階層別にみればDが最も多くEこれにつぎ最下層のGが第三位となつているかくの如く農家の經營規模も極めて零細である。從つて農業のみに依存することは困難であり、家計補充のための副業並に兼業を行わざるをえない。いま各階層別に兼業農家の割合を示せば、A〇、B二〇%、C七・七%、D三〇%、E五六・三%、F七五%、G一〇〇%となつている。即ち下層程兼業への依存度が高い。B層が二〇%で比較的高いが、實數は二戸で協同組合長と數員であり、C層は實數は一戸で銀行員である。かくの如く上層においては兼業の數がよいのであるが、下層程兼業への依存度が高いのみならず兼業の質もより悪くなり鐵道員、進駐軍勞務者、工業勞働者、日傭勞働者、闇屋等であり、より不安定なものとなつている。

なお農地の經營關係について自、小作地別にみれば、自作地二九三・〇一反（六〇・二%）、小作地（一部買收手續未了のものを含む）七〇・一二反（一四・四%）、用地一二三・七五反（二五・四%）である。ここに用地とは飛行場として戰時中收用せられた耕地のうち、戰後自由耕作が默許せられているものであるが、これが小作地以上に多く全耕地の約四分の一餘に達していることは注目すべきである。用地の耕作權は法律上確認されておらず耕作者にとつては不安ではあるが、他方において供出、課稅の對象となつていないため農家には有利である。用地の耕作は勞働力の過剩な或は機敏な農家によつてぬけがけに行われているため、客觀的にみれば公平とは云いえない。

既述の如く本部落は零細なる農業經營が支配的であるが、いま消費者、勞働者別家族員數を階層別にみれば次表の如く、まず家族員數は上層より下層に下るに從つて漸減している。消費者、勞働者別にも同一傾向にあり、下層程人口收容力の低いことを端的に示している。不在人口が下層においてより多いことは云うまでもない。VAについてはE層以下において特に大である。このことは此等の層において兼業への依存度の高いことに對應しているが、勞働者の絶對數のより少いことと相俟つてその生活は極めて不安定なることを示している。上層ではA層が特に大である。然しこれは右とはむしろ逆の事情を示すものである。

第三表　消費者、勞働者別家族員數

	A	B	C	D	E	F	G
家族員數	七・五	七・四	五・九	六・〇	五・八	四・九	四・二

消費者(V)	五・七	五・一七	四・七三	四・八二	四・三六	三・七六	三・〇一
勞働者(A)	三・九五	四・〇四	三・六	三・五九	二・六九	二・五五	一・五七
V/A	一・四四	一・二八	一・三二	一・二四	一・六二	一・四七	一・九二

註　消費者、勞働者は各々成年男子を一として集計

農業勞働に關しては自家勞力による集約化が行われている。戰前養蠶業の盛であつた時代には主として出雲半島からの出稼勞働者を多く年雇として利用していたが、現在は年雇は存在せず農繁期に田植、除草、收穫等のため比較的少數の日傭に依存している。ただ、A層のみはその雇傭勞働者數が特に多く平均年二百人であり、被傭者は村内の下層農のものが多い。

次に農業生産手段としての農機具及び役畜の所有狀態をみよう。

農機具についてまず發動機はA層の一戸が所有するのみであり、同層の他の一戸は部落共同作業所の建設費の半額餘を寄附している。この共同作業所は製粉、精白、製麵等の機械を設備している。足踏脱穀機、足踏製繭機、荷車、牛車、リヤカー等については、AB層は殆どこれを完備しているが、下層に下るに從つて減少し特にE層より激減してFG層は殆ど所有しておらず、鍬、鎌程度の農具を有するにすぎない。

役畜としては牛が飼育されているが、その階層別所有狀態は次表の如くである。

第四表　階層別役牛所有狀態

	A	B	C	D	E	F	G	計(平均)
實數	四	一〇・五	四・五	四	〇	〇	〇	二三
一戸當	二	一・〇五	〇・三五	〇・二	〇	〇	〇	〇・二七

註　仔牛は〇・五として加算

即ち、一町以上の經營面積を有する農家は全戸役牛を飼育し特にA層は平均二頭であるが、一町以下においては急激に減じ五反以下の農家においては全然これを飼育する能力のないことを示している。役牛は耕耘、運搬に利用されるのみならず、肥料不足の折柄肥料源として或は仔牛販賣による收入源として、農家にとつては現在極めて重要なる意義を有するが、本村においてはその飼育は特に飼料面からの制約が大である。本村は砂質にして平坦な海濱地帶であり、秣を刈取るべき原野、丘陵なく、また購入飼料は高價格であり且つ獲得困難であるため、飼料は主として自己の耕地よりこれを確保せねばならないのである。自給飼料確保のためには一町以上必要であることを第四表は示している。最下限の層においては牛一頭飼育のためには壯年の男子一人が之に專念せねばならないと云われている。尚お役牛を一戸平均二頭所有するA層においては、極力これを農業勞働に利用して人間勞働に代えている。

肥料は配給は少く自給も困難なるため、闇肥料に依存し硫安

海藻、アミエビ等である。硫安は主として上層農家において消費せられ、海藻及びアミエビは附近の海よりとれるもので各階層にわたつて使用されている。尙お副業として海藻取りに從事しているものもある。

三

各種農作物の作付割合は次表の如く、戰前とは全く様相を異にしている。

第五表　各種農作物作付割合

種別	A	B	B	D	E	F	G
米	三三・二%	二〇・一%	一九・二%	一八・三%	九・七%	七・八%	六・三%
麥類	二六・四	三〇・三	二三・一	二五・五	二七・五	二八・二	二六・二
甘藷	二〇・七	二一・五	二四・八	二四・六	二三・八	二五・七	二六・二
桑	一一・五	七・六	八・四	五・〇	〇・四	〇	〇
棉	四・一	三・三	三・二	三・四	三・二	二・三	一・一
瓜類	九・六	八・四	五・八	六・六	九・五	一三・二	一四・七
野菜	四・七	五・八	五・五	六・六	四・七	三・五	三・五
其他							
計	100	100	100	100	100	100	100

即ち、戰前とは逆に米、麥、甘藷の主食の作付面積が各階層において順倒的に多く七割乃至八割餘を占めている。而も上層のA最も低く以下BCDEと漸增し、FG層はまた逆にやや漸減しているが、而もFG層はD層よりもより高い。然し乍ら、主食の作付はその作物別により事情を異にする。

米作は上層程その作付割合が高い。水田面積は耕地の僅か一三・二%にすぎないが、その大部分が上層農家によつて耕作されていることがこれによつても明かである。

麥類は上層においてその作付割合が低く、下層になるに從つて漸增しており、甘藷においてはこの傾向がより大である。

本地方は水田少きため、麥類、甘藷への依存度が他地方よりも高かつたのであるが、戰時中以來の食糧難に伴つて、かかる食慣習はより强化された。然し階層別に主食に質的差異のあることは右によつて明かであろう。

戰前作付面積の最も多かつた桑園は、戰時中に次第に食糧生産に轉換させられ、年々激減した。終戰後においても食糧難は緩和されず、急激な變化は見られなかつたが、農村インフレも漸く峠をこし、その從食糧難もやや好轉し、他方作付統制の緩和と相俟つて、桑園の復活が徐々に行われるに至つた。昭和二十三年五月縣當局も蠶糸業振興計畫をたて積極的となつている。桑園の割合は主食生産における米作の地位の如く、上層において高く下層に從つて激減し、FG層には全然存在しない。

かつて桑にその地位を奪われた棉作は各階層にわたつて殘存しているが、その作付割合はA層が最も高くB－Eの中間層はほぼ同程度であり、F層はより低くG層は最も低い。棉作は

衣料品の缺乏並にその價格騰貴により、戰後特に昭和二十二年より增加した。綿は自家用衣料とされるのみならず、綿のまま或は農家の婦女子によつて綿、絣等に手織されて商品化している。一部には綿を買つて手織して生計を立てているものもある。棉作は現在極めて有利ではあるが、收穫が不確實であるため下層農家においてはその作付割合は低いのである。

瓜類、野菜の作付割合はCDの中間層最も低く、ABの上層これにつぎ、EFGの下層が最も高い。これらは自給にあてられるよりもむしろ商品化するものが多く、米子、境等附近の消費地を市場とするが、瓜類は京阪神地方に出荷されるものも多い。瓜類、野菜の作付割合は特に下層において高いことが特徴的である。これらは收穫が比較的確實であり、且つ耕地の集約的利用に適しているため、經營面積の零細な下層農家に多いのである。

其他の項目は豆類、馬鈴薯を主とするが、前者は間作によるものが多く、後者は近年供出用に作付させられており、收穫の大半が供出にあてられている。

以上各種農作物について階層別にその作付割合を考察したが本村においては商品作物の作付が徐々に增加しつつあるが、なお依然として食糧生産の比重が遙に大である。ただ後述する如く現在における食糧生産の比重の大なることは、戰前におけるそれとは性格を異にする面を有する。

また、各種農作物の反當收量は一般的傾向としては上層農家においてやや高く、特にE層以下においては低い。戰前と戰後の反當收量を比較すれば、桑園の如きは戰後が遙に低いが、麥甘藷等はむしろ戰後に高く、戰時中より食糧生産へ重點が移行せることに照應している。

次にこれら各種農産物の商品化率を階層別に示せば次表の如くである。

第六表　各種農産物商品化率

種類		A	B	C	D	E	F	G
米	一戸當平均生産量	三・九石	七・一石	四・五石	二・〇石	一・〇石	〇・四石	〇・二石
	商品化率	三〇%	四%	〇	〇	〇	〇	〇
麥類	一戸當平均生産量	三・二石	八石	七石	六石	三石	一・五石	〇・八石
	商品化率	六〇%	六%	四%	二%	一%	〇	〇
甘藷	一戸當平均生産量	三、三〇〇貫	一、七〇〇貫	一、三〇〇貫	九〇〇貫	五〇〇貫	四〇〇貫	二〇〇貫
	商品化率	五〇%	七%	五〇%	五〇%	三〇%	五〇%	四〇%
綿	一戸當平均生産量	一七貫	八貫	五貫	四貫	三貫	二貫	一・二貫
	商品化率	九〇%	八〇%	六〇%	六〇%	三〇%	六〇%	六〇%
繭	商品化率	一〇〇%	一〇〇%	一〇〇%	一〇〇%	一〇〇%	〇	〇

瓜類野菜	商品化率	五〇%	七〇%	五五%	五〇%	六〇%	五五%	七〇%

註　なお自給以外の供出物交用等のものをも商品化とみなした。

まず食糧生産における商品化率をみるに、米は僅にA層においてのみ三〇%であり、B層は四%、C層以下は全くみられない。

麥類においても同樣の傾向であり、A層のみ六〇%を占め他は殆ど問題にならない。

甘藷の商品化率は各層を通じて高いが、而もなお上層程より大である。しかも一戸當り平均生産量をみれば、上層においては餘裕のある商品化であるのに反し、下層においては窮迫して小家のうちを商品化していることを示している。甘藷の商品化は生甘藷によるもののほか、干甘藷としても盛に商品化が行われている。

食糧の商品化に關聯して注目すべきは供出の問題である。本地方は畑作地帶であるため供出は甘藷を主とし、これに少量の麥類と馬鈴薯であり、特に甘藷の供出に對する代替に縣内の水田地帶より米の還元配給が行われている。この原則は上層の農家にも適用せられており、從つて各戸平均一三・九石の米を收穫するA層が、米は全然供出せず却つて逆に二・一石の米の配給を受けているが如き不合理が存している。

綿の商品化はA層において特に高く以下漸減している。生産量の點からもA層が特に大量であり、以下漸減し、この商品化においても上層は家族用の衣料を充たして後の商品化であるのに對し、下層においては全くこれと逆である。

桑園は第五表の示す如く上層に集中しており、最近やや增加せんとしているが、産繭は協同組合によつて集荷され殆ど全量商品化されている。

瓜類、野菜の商品化率は他の作物とはやや事情を異にし、むしろ下層においてその商品化は高い。これはこの層が第五表の作付割合の高いことと照應している。然し乍ら、その作付割合の高さに比較すればその商品化率は相對的に低い。これは、耕地の零細な下層農においては回轉率の高い此等の作物に主力を注いで、より多くの收益をあげんとしているにも拘らず、自給部面からの制限を物語つてゐるものである。A層において商品化率の低いのは牛を多く飼育しておりその飼料にあてられることに基く。しかしながら、商品化する數量は絶對的には下層よりも上層においてより大である。

以上の如く上層程各種農産物について全面的且つ餘裕ある商品化が行われるに反し、下層においては窮迫せる飢餓的な商品化が强行されているのである。

なお農産物の商品化と關聯して貨幣收入源として重要な乳牛豚、雞の飼育狀態は次表の如くである。

第七表 乳牛、豚、雞の階層別所有狀態

種類		A	B	C	D	E	F	G	計（平均）
乳牛	實數	一	二・五	四	五・五	〇	〇	〇	一三
	一戶當	〇・五	〇・三五	〇・三	〇・一七	〇	〇	〇	〇・一五
豚	實數	〇	五	三	一四	四	一・五	〇	四六・五
	一戶當	〇	〇・五	一・七	〇・七	〇・五	〇・一七	〇	〇・五五
雞	實數	一三	一八八	六六	二〇〇	五九	一六	三三	四六二
	一戶當	六	一八・八	五・一	五	三・七	三	二・二	五・五

註　仔及び雛は〇・五とす。雛の中には同一目的で飼養されているゆえ家鴨を加算。

乳牛の飼育は本村の一特色をなす。これは郡内にある明治製菓工場の奬勵に基くものであり、牛乳をこの工場に收めこれとリンクして飼料を受けているが、明治製菓の牛乳買入價格は合四圓であり、これを他に流せば六圓である。兩者の割合は飼料關係によつて決定されるが飼料難の現在においては明治製菓へ納めるものがより多い。乳牛一頭による年純收益は約八萬圓（仔牛販賣をも含めて）と云われているが、その所有狀態は役牛の如く一町以上の經營農家においても所有せる農家は比較的少い。役牛におけると同じく上層程飼育數は多く且つ飼育の最下限も五反以上經營のD層であるが、乳牛の飼育は役牛のそれよりもより企業的色彩をおびており、農耕よりも乳牛に重點をおいている農家もある狀態である。既にふれた如く乳牛の場合においても重大の問題は飼料であり、この點に關しては役牛とも競合關係に立つているのである。

牛が上層に集中するのに對し、養豚は最上層及び最下層には見られず、C層に最も多くDB層これにつぎ、EF層においては激減している。即ち、養豚は經營面積五反以上の農家ではほぼ可能であるが、五反以下の農家においては極めて困難で、二反以下では絶對に不可能なることを示している。

養雞は卵の價格の高い現在、無視すべからざる收入源であり各層にわたつて行われているが、上層程飼養數が多い。養雞もほぼD層を境として上下に分れているが、ただE層がややD層に近く、FG層においては卵の販賣能力は殆ど無いものとみねばならない。B層が特に多いのは、その中の一戶が養雞業を兼營し一二〇羽飼養せるためによる。

次に各階層別平均年總貨幣所得を公租公課と相比して示せば次の如くである。

	A	B	C	D	E	F	G
一戶當年貨幣所得	三四・五萬	一七・〇萬	九・五萬	六・〇萬	四・二萬	三・五萬	二・〇萬
一戶當公租公課	二・〇萬	〇・八萬	〇・三五萬	〇・二六萬	〇・一七萬	〇・一萬	〇・〇七萬

ここに貨幣所得とは、生産物のうち直接自家消費する以外は物交用などをも含み、更に副業或は兼業收入並に動産及び不動

産の賣却等による貨幣所得をも加算した。この算定は極めて困難であり、推定にもとづく點が多いのである。

更に農業經營費、家計費及び貯蓄等についても調査したが、調査の性質上困難であり且つ短期間であつたため、精密な調査は行いえなかつた。

各階層別に收支を比較すれば、七反以上の經營を行うC層においてはほぼ安定しており、五反以上のD層においては不安定であり、兼業への依存度が增大している。E層以下は漸次轉落農家の傾向が强く、賃勞働者化しつつある。

C層以上、特にA層においては多數の勞働者を雇傭し、農機具、役牛を利用して合理的な多角經營を行い、他方乳牛をもとり入れて商品生産を强化しており、所得も多く、貯蓄も亦多く且つ農業投資を積極的に行つている。これに次いでB層は農機具、役牛をも完備して農業生産の基礎を確立している。

なお、本村は公租公課及び供出が輕く、調査に際してもこれに對する不滿を殆どきかなかつた。然しこの主要な原因は飛行場に收用された用地の存在によるものであり、他面この飛行場によつて如何に多くの農家が轉落したかを考えねばならない。

公租公課は輕くはあるが、階層別にみれば右表の示すごとく上層程相對的により輕くなつていることをも看過してはならない。供出に存する不合理には既にふれた。

四

本村は關西農村においても特殊な型の農村である。人口收容力の限界を遙にこえた膨脹せる人口は、一方では零細な耕地を集約的に耕して、多角的な商業的農業を發展せしめ、他方、この耕地をえられぬ過剩人口は前述せる各種の兼業或は副業に從事し、次第に下層へと轉落しつつある。通勤時には列車は混雜し、自由式農業の發達と相俟つて、近郊型農村の性格が强い。

本村は明治以降、食糧生産を從とする商業的農業が發達したが今次戰爭を契機として食糧生産を主とする經營方式に轉換した。而して終戰後においても食糧難の緩和しないのに伴つて、依然として食糧生産に重點がおかれている。しかも食糧生産において現在その商品化は特に上層において高いことは看過されてはならぬ。然し乍ら、農村インフレは漸く峠をこし、食糧の闇價格も相對的にやや下落すると共に、他方貿易再開の希望と共に、蠶繭、棉作、瓜類、野菜への關心が次第に高まり、乳牛の飼育もとり入れられるようになつた。本村は早くから商業的農業の發達せるため、農民の商業的意識も敏感であり、「桑一反作れば麥二〇石を買いうる」と農民自身述べている狀態である。

然し乍ら食糧難が續く限り、食糧生産の比重は依然として强く、商業的農業はこれと競合しつつ徐々に發展してゆくであろ

う。

また、これと關聯して最後に本部落における農民層の分解について見よう。既にふれた如くほぼ安定せる農家は七反以上の經營農家であり、五反程度の農家は轉落の危機にさらされており農村インフレも過去の夢となろうとしつつある現在、その前途は悲觀的であろう。五反以下の農家は明かに轉落の一路を辿つている。資本主義的發展の方向を辿りつつあるものはA層のみである。其他の層においては農産加工、養雞等を行う特殊の農家に見られるにすぎず、資本主義的發展は殆ど明白には現れていないのである。

附記　本調査は綜合農業研究所の援助により京大經濟學部農業經濟研究會員が共同に行つたものである。